

## 第1章

# 情報社会と〈人間〉の変容

合庭 惇

国際日本研究専攻／国際日本  
文化研究センター

### 1.1 はじめに

20世紀の世紀末に突然出現して10年間で急激に成長したインターネットは、紙メディアによって担われてきた出版・新聞、あるいは電波メディアによる通信と放送という伝統的なマスメディアを代替するまったく新しいメディアとしての地位を確立しつつある。インターネット利用者の数も、2002年2月には全世界で約5億4400万人と報告されているように増加する一方である。思えば、20世紀の世紀末は、インターネットの台頭とその急激な普及という情報通信革命に揺らいだ10年であった。

このインターネットも、伝送路の高速広帯域化によって本格的なブロードバンド時代を迎えることとなった。2001年7月に総務省が公開した『2001年度版 情報通信白書』によれば、「平成12年から平成13年初旬にかけて

のIT（情報通信技術）の特徴は、一言でいえば、光ファイバ網等への支援や競争促進の環境整備等によりもたらされたDSL（デジタル加入者線）やケーブルインターネットの急速な普及、常時接続サービスの普及・低廉化に象徴される本格的なブロードバンド時代の到来であり、まさしく「ブロードバンド元年」と位置付けられる」と述べている。

1980年代前半のニューメディア元年に始まるわが国の情報通信革命は、パーソナルコンピュータが普及したマルチメディア元年、そして90年代に入ってからインターネット元年を経て、ようやくブロードバンド元年へとたどり着いたといえよう。

ところで、「ブロードバンド時代」とは『情報通信白書』によれば、「国民の誰もが、1) どんな情報でも短時間で送受信が可能となり（例えば100メガのFTTH（Fiber To The Home）の場合、2時間の映画を5分で伝送可能）、2) ネットワークに常時接続、3) パソコンだけではなく、携帯電話や情報家電などさまざまな機器を用いて、多様な生活場面でインターネット活用が可能となる状況が現実のものとなり」、「流通する情報の大容量化が進み、全ての「情報」がネットワーク流通の対象となる」時代とされている。

そして、ブロードバンド時代の歴史的意義を「白書」は、次のように表現している。

「こうしたブロードバンド・インターネットの個人レベルへの浸透により、いわば人間は「無限の情報空間」を自由に活用することが可能になる。これは、……企業活動の効率化や多様なライフスタイルの実現といった「変化」にとどまらず、個人の知的活動の飛躍的な向上をもたらし、国境を越えた地球規模での文化的「変革」にまで達するポテンシャルを秘めている。その意味で、ブロードバンド・インターネットはちょうど、中世イタリアに端を発した「ルネッサンス」が、個人の思想活動の活性化をもたらし、「暗黒の中世」から人間中心の近代文化への転換を実現したことにも対比できるものと

考える。」

ヨーロッパ中世が暗黒時代であったかどうかはさておき、時代的にいうならばグーテンベルクの活版印刷が果たしたと同じような役割をブロードバンドが担っているという認識である。確かにブロードバンドが実現すれば、私たちは「無限の情報空間」を手にする可能性は大きいであろう。しかし、この無限の情報空間はどのような人間や社会・国家を産み出すのだろうか。ここでは、まずグーテンベルクの活版印刷がもたらした歴史的影響を再考したうえで、インターネットという未知のメディアが人間存在にどのような変容をもたらしつつあるか考えてみたい。

## 1.2 メディアと公共圏

メディアの存在というものは人間を規定すると語ったのは、カナダの英文学者マーシャル・マクルーハン (Herbert Marshall McLuhan, 1911-80) であった。1950年代テレビの普及とともに、人間そして社会が変化しつつあることにマーシャル・マクルーハンは着目したのだった。口頭文化から書字文化そして活字文化を経て電気・電子文化に至る人類文明の歩みは、メディアによる人間・社会形成の歩みでもあった。社会はコミュニケーションの内容によってではなく、むしろそれを伝えるメディアの性質そのものによって形成されるとするマクルーハンによれば、ヨーロッパにおける「暗黒」の中世から近代への大変革はグーテンベルクによる活版印刷の発明によってもたらされたのである。

活版印刷つまり「活字 (movable types) を用いた印刷は思いもおよばぬ新環境を創り出した。それは「読書界」(public) を創造したのである。それまでの写本技術は国民的規模で「読書界」を生み出すのに必要な強烈な拡張力を欠いていた。われわれがここ数世紀の間、「国民」(nation) の名で呼んできたものはグーテンベルクの印刷技術が出現する以前に発生したことは

なかったし、また発生する可能性もなかったのである。そして、それと全く同じ理由から、地球上のすべての成員を巻き込んで呉越同舟の状態にしてしまう力をもつ電気回路技術が到来した今日以後、そうした旧来の「国民」は生きのびることはできないであろう。印刷された文字によって創り出された「読書界」のユニークな性格として、個人および集団いずれの内部にも生じた、視覚志向にもとづく強烈な自己意識が挙げられよう。他の諸感覚から視覚機能だけを切り離し孤立させることで行われる強烈な視覚強調がどのような結果を生み出すことになったかを物語るのが本書〔『ゲーテンベルクの銀河系』〕の話題となる。また本書のテーマは、連続性、画一性、連結性といった視覚に特徴的な諸様式が、時間と空間の観念にも延長され適用されてしまう現象にある。他方、電気回路は視覚性に恵まれた印刷文字が行ったような規模では、とうてい視覚的諸様式の身体外部への延長に手を貸すことはできないのである」（マクルーハン『ゲーテンベルクの銀河系』森常治訳、1986年、ii頁）。

ここでいわれている「読書界」(public)とは、「読書する公衆」によって形成される公共圏である。活版印刷という複製技術は、それまで人手によって一冊一冊書き写されていた書物を大量生産へと導いた。ゲーテンベルクの時代にはまだ高価であった印刷本も、羊皮紙に代わる紙の大量生産が可能となり、ゲーテンベルクのゴシック体よりも小ぶりの活字であるイタリック体の発明により書物のサイズが小型化され、また老眼鏡の発明などがあって、15世紀末から16世紀にかけて普及が著しく進むようになる。そして、16世紀半ばにはヨーロッパには書物の一大マーケットが出現することになる。このような出版メディアの登場が、「読書する公衆」によって形成される「読書界」の成立を促したのである。

このような「読書界」の典型例は英国のコーヒーハウスである。「読書界」を公共圏の中核に据えたドイツの哲学者ユルゲン・ハーバマスは、その著『公共性の構造転換』（細谷貞雄訳、未来社、1973年）においてコーヒーハ

ウスを次のように記述している。「すでに17世紀の70年代に、政府はコーヒーハウスでの議論がひきおこす危険に対抗する布告を出す必要に迫られていた。コーヒーハウスは、政治不安の発生源とみなされるのである。「人々はコーヒーハウスのみならず、公私を問わず他の場所や集会においても、彼らの理解せぬ事柄を妄評し、陛下の良民の胸中に一般的な嫉妬や不満を醸成して、不遜にも国家の措置を非議冒瀆する挙に出た。」1695年の出版免許令によって事前検閲制は倒れる。女王はしばしば検閲の復活を議員に勧告するが、成功しない。それ以後も新聞は厳しい文書誹毀法や王室及び議会の数多くの特権による制限を受け、1712年に決議された印紙税の結果として一時的な反動も起こる。新聞発行高は低下し、雑誌の紙数は少なくなり、全く姿を消したものもある。それでも、他のヨーロッパ諸国の新聞にくらべれば、イギリスの新聞は独特の特権を享受しているのである」（同書、87-88頁）。

コーヒーハウスに集う人々は、活版印刷という複製技術がもたらした新聞・出版メディアを通じて情報を入手・交換して公的な議論を盛んに行っていたのである。その議論は、当然、絶対王政批判へと連なるし、絶対王政は検閲や出版免許令によって批判に対抗しようとするであろう。英国におけるコーヒーハウスは、ドイツにおいては読書クラブとして機能する。

「政治的に論議する公衆は、とりわけ市民層の私的集会にその場所をみいだす。18世紀の最後の2、30年間に、政治雑誌も含めて雑誌が盛んになり、これが民間人の社交生活のまさに結晶点にもなってくる。これらの雑誌そのものが啓蒙時代の「読書欲、いな「読書熱」の証拠となっているだけでなく、70年代以来、私的および商業的な読書会がすべての都市に普及し、それが比較的小さな都市にも及んでくるので、これらの制度の価値と無価値についての一般的討論も始まるほどになった。世紀の終わりごろには、ドイツで270以上の読書会の存在を確認することができた。それは大いの場合、特別の部屋をそなえたクラブであって、これが雑誌や新聞を読み、また、これと同様に重要なことであるが、読んだ事柄について談論する機会を提供して

いた。最古の読書サークルは、新聞購読の低廉化を助ける共同予約にはかならなかった。これに対して読書クラブは、もはやこのような財政的動機から生じたものではない。クラブはその議長を定則に従って選び、新規加入者の採用を多数決で議決し、一般に論争問題を会議方式で処理し、婦人を排除しゲーム〔ギャンブル〕を禁止するものであって、もっぱら、論議する公衆として公共圏を形成しようとする市民層の私人たちの要求に奉仕するものである。彼らは雑誌を読み、これについて談論し、個人的見解を交換し、そして90年代以来、「公論」とよばれたものの表明に参加しようとする。」(同書、103頁)

まさしく、マクルーハンが指摘したように「社会的に見ると、活字印刷という形をとった人間の拡張は、国家主義、産業主義、マス市場、識字と教育の普及というものをもたらした」のである。なぜなら、「印刷は正確に反復可能なイメージを提供し、それが社会的エネルギーを拡張させる、まったく新しい形態を刺激したからであった」(マクルーハン『メディア論——人間の拡張の諸相』栗原・河本訳、みすず書房、1987年、175頁)。印刷はルネッサンス期に大きな心理的および社会的エネルギーを放出させ、近代を成立させたのであった。この心理的および社会的エネルギーは、18世紀には啓蒙思想として知られるようになる。

カントは、『啓蒙とはなにか』(1784年)において「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜けでることである。ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である。ところでかかる未成年状態にとどまっているのは彼自身に責めがある、というのは、この状態にある原因は、悟性が欠けているためではなくて、むしろ他人の指導がなくても自分自身の悟性を敢えて使用しようとする決意と勇気とを欠くところにあるからである。それだから「敢えて賢かれ! (Sapere aude)」、「自分自身の悟性を使用する勇気をもて!」—これがすなわち啓蒙の標語である」と

語り、「啓蒙を成就するに必要なものは、実に自由にはかならない、しかもおよそ自由と称せられる限りのもののうちで最も無害な自由—すなわち自分の理性をあらゆる点で公的に使用する自由である」とした。

そして、「理性の公的使用」とは、「ある人が学者として、一般の読者全体の前で彼自身の理性を使用することを指している」と述べているが、これこそ後にハーバマスによって「読書し議論する公衆」として規定された公共圏の構成要素に他ならない。彼によれば、「哲学者たちがそこで彼らの批判的業務をいとむ公共圏は、その中心がアカデミックであるにもかかわらず、決して単にアカデミックな公共圏ではない。哲学者たちの討論は、政府の面前で、政府への情報伝達と批判のために行なわれ、同様にそれはまた「人民」公衆の前で、彼らをして自らの理性を用いさせるための指導として、おこなわれる」（ハーバマス『公共性の構造転換』146頁）のである。

### 1.3 近代的主体の成立

マクルーハンや彼の後継者たち、またハーバマスらが主張するように、メディアとその使用が人間様態を決定するならば、活版印刷の伸展によって誕生した「読書する公衆」こそ、「近代的人間」の範型ということになる。つまり、「近代」の中核領域はまさしくゲーテンベルクの銀河系によって占められているのである。そして、西欧の近代市民社会における人間の「主体」像は、「自由で自律した個人、あるいは階級意識をもつ集団」または「支配による従属とは対照的な合理的で中心化され統合された視点」として捉えられ、「男性中心主義」「西欧中心主義」の立場から描かれてきた（Mark Poster, *The Second Media Age*, Polity Press, 1995, p. 136）。このような西欧近代主義的な主体観に対しては、古くはフランス構造主義のなかで構成された問題意識、さらには近年のカルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズムの立場からの批判が顕著となっているが、西欧的近代と主体性の問題を

整理しておこう。

西欧的近代についてこれまで多くの言説がなされてきたが、ここではマルティン・ハイデガーの「世界像の時代」における「近代」と「主体」について触れてみる。「世界像の時代」(1938年)は、彼の主著である『存在と時間』(1927年)とともに「ヒューマニズムについて」(1949年)、「同一性と差異性」(1957年)と並ぶ代表作の一つである。ここで取り上げる「世界像の時代」(Martin Heidegger, Die Zeit des Weltbildes, aus "Holzwege")は、1938年フライブルクにおける講演「形而上学による近代的世界像の基礎づけ」として発表されたものである。

ここでいう形而上学とは、「存在するもの (Seiendes)」の本質への反省(省察)であり、「真理」の本質についての決定を指しているが、決定的に重要なことは「形而上学は時代を基礎づける」ことである。つまり、形而上学を介してまさに「形而上学による近代的世界像の基礎づけ」を問うことが、「世界像の時代」の狙いである。

ハイデガーは、まず近代 (Neuzeit) の本質的な現象として、(1) 近代の学問、(2) 機械技術 (Maschinentechnik)、(3) 芸術が美学の領域に入った、(4) 人間行為が文化として捉えられかつ完成される、(5) 神々の退場という5項目を掲げる。

近代 (Neuzeit) という言葉は、一般の哲学史ではルネサンスからヘーゲル (1770-1831) の死までを Neuzeit (近世) とし、以後を Gegenwart (現代) としているのであるが、ハイデガーのいう Neuzeit は現代も含んでいると考えてよいだろう。

(1) 近代の学問とは近代科学の成立であり、(2) 機械技術 (Maschinentechnik) とは数学的自然科学の実用への適用であるが、ハイデガーによれば、それはたんなる適用ではなく実用が数学的自然科学の使用を要求する事態であるという。それ故に、機械技術は近代技術の本質の最も明瞭な分岐点



であり、機械技術の本質こそが近代形而上学の本質となるのである。(3) 芸術が美学の領域に入ったというのは、近代以前には神への捧げものであった芸術が、人間の純粋な感性的表現の対象として論じられるようになったことであり、「芸術作品が体験の対象になり、芸術が人間の生の表現とされる」。(4) 人間行為が文化として捉えられかつ完成されるとは、文化が人間のもつ最高の財の保護による最上の価値の実現であり、このような文化の本質には文化戦略が潜んでいるという。(5) 神々の退場とは、単なる無神論の成立ではない二重の出来事であり、世界の根拠が「無限なもの・無制約的なもの・絶対的なもの」として設定されるかぎり世界像はキリスト教化し、キリスト教が、キリスト教的世界観を解釈し直してみずからを近代に適合させるような事態を指している。つまり、神々の退場とは神ならびに神々についての決断を欠いた状態であり、神々の退場によって人間は宗教性を排除するどころか、神々と人間との関わりが宗教的体験へと転化するのである。神々の退場によって神々は逃げ去るのであるが、ここに生じた空虚は、神話の歴史記述的・心理的探求によって埋められるとハイデガーは述べる。

このような本質的現象を抱える「近代」であるが、そこに成立する「世界像」とはいかなるものか。ハイデガーによれば、「世界」とは存在するものの総称(宇宙・自然・歴史など)であり「世界根拠」である。一方、「像」(Bild)は、なにかについての模写(Abbild)であるが、「世界像」とは、存在するもの全体の写し以上のものであり、「存在するものが、それに属しかつそのなかに成立しているものすべてにおいて、体系として私たちの前に立っている」ことになる。つまり、「世界像とは、本質的に解すれば、世界についてのひとつの像を意味するのではなくて、世界が像として捉えられていることをいう」のであり、そこでは、「存在するものが、世界像となる場合に、存在するものについて全体として、本質的な決定がおこなわれる。存在するものの存在は、存在するものが表象されてあること(Vorgestelltheit)において、探求されかつ見いだされる」のである。

換言すれば「近代の世界像」とは、「近代の世界像 *Weltbild der Neuzeit* と近代的世界像 *neuzeitliches Weltbild* という言い方は、同じことを繰り返している言い方で、かつて以前に存在しえなかったところのなにものか、すなわち中世的世界像とか古代的世界像とかを意図している。世界像は、かつての中世的なものから近代的なものになるのではなくて、そもそも世界が像になるというそのことが、近代の本質を表している。これに反して中世にとっては、存在するものは、最高原因としての人格的な創造神から造られた被造物 *ens creatum* である。存在するものが在ということは、創造されたものの秩序の、それぞれ一定の段階へと属することと、このように惹き起こされたものとして創造の原因に対応すること（存在の比喩 *analogia entis*）をいう。中世では決して、存在するものの存在は、それが対象的なものとして人間の前にもたらされかつ人間の知識と処理の領域内に置かれ、こうしてひとり存在的であるような、そのようなところには、決して成立しない」のである。

そして、「18世紀から始まって、人間学においてますます独占的な傾向を増していくところの世界解釈が根を張ることは、存在するもの全体に対する人間の根本態度を、世界観 *Weltanschauung* として規定することのうちに、その表現を見いだす」として近代的「表象」(*representatio*)の働きに注目する。いうまでもなく、このような世界像を支えているのが近代的主体性としての近代的自我つまり近代的人間である。

ここに規定されたような近代的人間は、17世紀科学革命によるキリスト教的宇宙観の崩壊に由来するのであるが、さきに見たように近代的人間を決定づけているものこそメディアの力であった。

## 1.4 近代的主体の終焉

かつてミシェル・フーコーは、その著『言葉と物—人文科学の考古学』（渡辺・佐々木訳、新潮社、1974年）の結語において次のように語っていた。「人間とは、わたしたちの思考の考古学によってその日付の新しさがたやすく示されるような発明である。そしておそらく、その終焉は間近なのだ。そのような〔知の基本的〕諸配置はかつて現れたものである以上消えてゆくのであれば、また、ちょうど古典主義時代の思考の地盤が十八世紀の終末でくつがえったように、そのような諸配置は、わたしたちにとってはたかだかその可能性を予感できる程度の何らかの出来事〔事件〕によって、しかしいまのところはまだその形態もその約束もわからない出来事〔事件〕によってくつがえってしまうのであれば—そのとき賭けてもいい、人間は波打ちぎわの砂に描かれた顔のように消されるであろう。」

フーコーによれば、「人間」とは近代市民社会における発明品だというのである。人間のアイデンティティ観や主体観というものは、カントが『啓蒙とは何か』において語ったように、「読書し議論する公衆」を中核領域として形成されてきたものである。ここでは、活版印刷によって紙の上にしかりと固定された文字情報が「正確に反復可能」であるように、「自由で自律した個人」が「合理的で中心化され統合された視点」によって固定化され、西欧と男性に限定されてはいるものの、繰り返し正確に再生産されてきたのだった。

このような近代的個人、「読書し議論する公衆」である主体が発信する情報を保護するために整備されてきたのが、例えば、「著作権法」である。しかし、デジタル・メディアが急速に伸展している今日、この著作権法は度重なる修正を強いられている。これまで、グーテンベルク銀河系とそこに隣接するメディアの世界を対象領域としてきた著作権法にとって、デジタル・メ

ディアの創出するまったく新しい環境は未知の分野であるから当然のことであろう。

この著作権法には財産権と人格権についてそれぞれ規定があるが、ここでは、「著作者人格権」として規定されている部分を見ておきたい。情報の発信主体である個人（著作者）の人格は、「公表権」「氏名表示権」「同一性保持権」の三点で保護されている。「公表権」とは、「著作者は、その著作物でまだ公表されていないものを公衆に提供し、又は、提示する権利を有する」（第十八条）ことをいい、「氏名表示権」とは、「著作者は、その著作物の原作品に、又はその著作物の公衆への提供若しくは提示に際し、その実名若しくは変名を著作者名として表示し、又は著作者名を表示しないこととする権利を有する」（第十九条）ことをいう。ついで「同一性保持権」については、「著作者は、その著作物及びその題号の同一性を保持する権利を有し、その意に反してこれらの変更、切除その他の改変を受けないものとする」（第二十条）とある。

ここに規定されている著作者人格権とは、まさしく「自由で自律し」「合理的かつ中心化され統合された視点」によって確立された近代的主体が情報発信において保護されている人格権なのだ。著作権法においてこのように規定され保護されている近代的主体観あるいはアイデンティティ観が、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズムの論者たちによる批判をまつまでもなく、ここ数年の間に登場してきた新しいメディア「インターネット」によって揺らいでいるのである。

それでは、ゲーテンベルクの銀河系に取って代わる「現代」の中核領域はなにかといえば、それはインターネットということになる。そして、インターネットの銀河系における人間存在のありかた、別のいいかたをすれば人間のアイデンティティはどのような形態を取るのだろうか、という問題がここから生じてくることになる。

フーコーの意図はさておき、彼が語っていた「出来事」、つまり「わたしたちにとってはたかだかその可能性を予感できる程度の何らかの出来事〔事件〕によって、しかしいまのところはまだその形態もその約束もわからない出来事〔事件〕によってくつがえってしまうのであれば」という「出来事（事件）」が、インターネットによって導かれつつあると考えるならば、その事態とは如何なるものだろうか。

このことについて、情報様式論によって知られるカリフォルニア大学のマーク・ポスターが、きわめて刺激的な発言をしている。以下に紹介する文章は「公共圏としてのインターネット?」(Mark Poster, “The Net as a Public Sphere?”)と題するものであるが、インターネット・マガジン『HotWired』(www.wired.com/wired)からの引用である。

「……現在、インターネットのニューズグループ、MOOs、そして他のヴァーチャル・コミュニティは、二一世紀における新たな民主主義を発生させる公共圏としてもてはやされている。しかし、これらの要求は基本的に間違っている。人々は、インターネット・カフェと過去のアゴラ（公共圏としての広場）との決定的な違いを見誤っているのだ。

……インターネットにおいて、人々は同等の立場で話すことができる。しかし、合理的な議論が優先することは滅多になく、コンセンサスを得ることはまったく不可能である。アイデンティティの定義は、公共圏においてとインターネット上とは決定的に異なるのである。

伝統的に、人のアイデンティティは接触によって定義されてきた。アイデンティティは、身体に根ざしているのである。

この身体という安定性が、個人がその地位によって認証されることを強制するし、人々の間で信頼を築くことを許容する。

しかしインターネットは、自分自身のアイデンティティをみずから定義し

たり、勝手に変えることを許している。john@well.com というアドレスで知られている中年の元ヒッピーが、次の瞬間には kate@aol.com という十代の少女を装うことが可能である。このようなプロテアン・アイデンティティ〔ギリシャ神話に登場する海神プロテウスのように姿形を変幻自在に変化させるアイデンティティ〕は、これまで我々が了解してきたような安定した政治的なコミュニティを形成するものではない。

……インターネット上では、アイデンティティは流動的であり、同意しないことが奨励されていて、そして、「正常な」地位の目印が不在であるので、それは公共圏の空間とは似てもつかない社会的「空間」なのである」（なお、この問題についてはシェリー・タークル『接続された心—インターネット時代のアイデンティティ』日暮雅道訳、早川書房、1998年、が詳しい）。

インターネットはグローバルなコミュニケーションを可能にし、しかも、「いつでも／だれでも／どこからでも」というフリースピーチ／フリーアクセスとユニバーサル・アクセスを実現しつつある。だが、ここには近代的主体性やアイデンティティを超えた空間が広がっていることを忘れてはならない。